

保育者養成における実践的教材としての「木育」

—学生の「学び」の深まりを中心に—

矢野 真

(児童学科准教授)

田 爪 宏 二

(京都教育大学教育学部准教授)

松 井 勅 尚

(岐阜県立森林文化アカデミー教授)

本研究は、保育者養成における「木育」の実践がその後の造形領域における授業や実践、また教材研究など、学生にとってどのように「学び」の深まりへとつながっているか、その有効性について明らかにした。「木育」に参加した学生17名への質問紙調査を中心に、作品制作や教材研究に対する取り組みについての聞き取り調査および行動観察を行った結果、「木育」の実践が、自然や人とのふれあい・関わり方、材料の捉え方、作品を通した感覚の大切さ、表現力の大切さなどを考えて取り組むことが明らかとなり、造形領域に関わる実践的教材として有効であることが導出された。

キーワード：保育者養成 木育 教材開発 実践的教材 表現領域

1. 本研究の背景と目的

本研究は、平成23～24年度の京都女子大学公開講座における「木育」ワークショップを通じて、保育者養成における「木育」の実践が、造形領域に関わる実践的教材としてどのように有効であるかということについて考察するものである。

近年の保育者養成において、より高い「保育士の専門性」が語られ、「保育所内外の空間や物的環境、様々な遊具や素材、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく技術」として、表現技術を保育との関連で修得する必要性が保育所保育指針においても提示されている（保育所保育指針解説書、2008）。「教材開発を通した子どもの創造性を育てる表現教育のあり方に関する体系的研究」（2007～2009年度科学研究費補助金 基盤（C）課題番号：19500655）を中心に表現教育のあり方の調査および研究を進めていくなかで、表現領域を通して高い「保育士の専門性」をもった保育者を育成するためには、保育者養成校と保育現場の連携、および地域との連携、さらには造形作家との連携を通して、具体的な造形領域の実践や教材開発を提

示していくことが必要であるということが明らかとなった（矢野、2011）。

このような視点に立ち、様々な造形領域の実践や教材開発を具体的に検討する研究が行われている。具体的には、矢野・吉津（2011）は「おととかたち」、矢野・松井は（2012）「保育者養成校における『木育』実践の可能性」に配慮した「木育」による造形ワークショップの実践に着目し、先のワークショップを通した学生の学びを手がかりに、保育者養成における学びとしての「保育士の専門性」について考察を行っている。

特に、矢野・松井（2013）の「保育者養成校における『木育』実践の可能性Ⅱ」において、学生が「木育」の実践を通して、将来の保育者に必要な造形領域の教材研究および実践に役立つという具体的意識をもつことができたことを明らかにした。

そこで様々な造形領域の実践や教材開発を具体的に検討する一つとして、「木育」による保育に着目し、保育者養成における「木育」実践の可能性について、ワークショップを中心とした学生の学びを手がかりに実践とその考察を

行った。木育推進プロジェクトチーム（2004）によると、「木育とは、すべての人が木とふれあい、木に学び、木と生きる取り組みであり、人と木や森とのかかわりを主体的に考える豊かな心を育むこと」を目的としており、生活やあそび、自然環境などと関連付けながら、造形領域の実践や教材開発が行われる必要があることを考えると、「木育」による授業実践は保育のなかで効果的に活用することができるのではないだろうか。

こうしたことを踏まえ、本研究は保育者養成における「木育」の実践を中心に、その専門性を育てるために必要なことは何かということについて検討を行う。

2. 研究の方法

平成23～24年度の京都女子大学公開講座における「木育」ワークショップの実践は、以下の通りである。

平成23年度京都女子大学公開講座における「木育」によるワークショップでは、「嗅覚を育むための木育ペンダントづくり」を具体的なテーマとし、本研究者・幼児・保育関係者・学生との関わりを通じた保育においてつくることの可能性を明らかにするための実践を行った。

- ・日 時：平成23年7月2日，13：00～17：00
- ・場 所：京都女子大学B校舎 114教室
- ・参加者：幼児および児童，保育関係者，学生
計34名

実践内容は、「木育」について、講義形式による日本の現状や文化を通じて理解し、参加者が自己紹介を通してコミュニケーションを図った。

参加者は用意された木材（クス）を紙やすりで磨きながら、「誰のための」「どんな願いを込めて」「形と願いとの関係」を、具体的な形につくりながらペンダントにした。

また、面識のない参加者同士でペアを組み、プレゼンシートをつくり、学びを振り返った。

平成24年度京都女子大学公開講座における「木育」によるワークショップでは、「森のかけ

らのお守りづくり」を具体的なテーマとして、平成23年度同様の目的をもって実施した。

- ・日 時：平成24年6月30日，13：00～17：00
- ・場 所：京都女子大学B校舎 114教室
- ・参加者：幼児および児童，保育関係者，学生
計35名

実践内容は、「木育」について、講義形式による京都の現状や文化を通じて理解し、参加者が自己紹介を通してコミュニケーションを図った（図1）。

参加者は京都で採れた北山杉を紙やすりで磨きながら、「誰のための」「どんな願いを込めて」を考えたお守りづくりを行った。

また、面識のない参加者同士でペアを組み、プレゼンシートをつくり、学びを振り返った。



図1 具体的に「木」について学ぶ学生

本研究では、これら「木育」の実践がその後の造形領域における授業や実践、また教材研究など、学生にとってどのように「学び」の深まりへとつながっているか、その有効性について明らかにする。

具体的には、平成23～24年度の京都女子大学公開講座における「木育」ワークショップに参加した学生17名への質問紙調査を中心に、作品制作や教材研究に対する取り組みについての聞き取り調査および行動観察を行う。

3. 結果と考察

3-1. 質問紙調査の結果

設問1・2 木育ワークショップの学びの効果

質問紙調査の設問1では、「木育のワークショップで学んだことが、現在の授業や課外活動などに役立っていますか」と質問し、「かなり役立っている／役立っている／そんなに役立っていない／役立っていない」の4件法で回答を求めた。回答の分布を表1に示す。対象者17名中16名(94.1%)が役立っていると回答しており、ワークショップは一定の効果があったと思われる。なお、「そんなに役立っていない」と回答した1名について、その理由として「普段の授業や生活の中で木を扱う機会が少ないから、ワークショップで学んだことを活かせる機会がない。」と述べており、授業の内容を実際の場合で活用することの難しさを感じていることがうかがわれる。

表1 木育ワークショップの学びの効果(設問1)における回答の分布以下の通り(括弧内(%))

	かなり 役立って いる	役立って いる	そんなに 役立って いない	役立って いない
人数 (%)	2 (11.8)	14 (82.4)	1 (5.9)	0 (0.0)

設問2では、設問1で質問した学びの効果について、「それはどのような点から思いますか」と質問し、自由記述により回答を求めた。

ところで、近年、授業の目標および評価においては、観点として「知識・理解(認知的側面)」「意欲・関心(動機付けの側面)」「感性・表現(情操的側面)」「将来の進路への応用(キャリアデザイン)」が取り上げられることが多い。ここでは、それに依拠し、以下のカテゴリを設定し、それに含まれる記述を抽出した(括弧内は各カテゴリに該当する記述が見られたものの人数および割合(%))。

- A) 知識・理解：ワークショップを通して得た知識に関する記述(4名(23.5%))。
- B) 関心・意欲：ワークショップを通じた興味や関心、楽しさを感じたことなど(8名(47.1%))。
- C) 感性・表現：木育のワークショップを通して意識が変わったこと、感性や表現について

の気づきなど(6名(35.5%))。

- D) 保育・子どもへの応用：木育のワークショップを通して、保育者の役割や子どもへの活用について考えたこと(7名(41.2%))。

以下では、各カテゴリの記述内容について、代表的なものを示し、その傾向について述べる。

A) 知識・理解

- ①「木育という言葉を知ったことで“木”に反応するようになった。
- ②木や木材についての基本的な知識が、とても役立っています。
- ③日常生活で身近なところにある木がどのように形を変えるのかを学べる点。
- ④木によって重さが違ったり、木同士で音が出たり…様々な方法でモノの感じ方ができることを知りました。
- ⑤木の性質や使い方を学ぶことが出来た。

知識・理解の側面に関しては、木育という言葉を知ったこと(①)、形や音といった木の性質についての知識が深まったことを示す記述が見られている(②～⑤)。

B) 関心・意欲

- ①木が日本の文化に根づいている、という事で木に対する親しみを私自身が持つことが出来た事。
- ②木育を通して実際に木について学び触れることで木に対して興味をもつことができた。
- ③どのようなにおいがするのかとにおいてみたり、木の名前は何かと疑問に思い木に書いているプレートに目を配ったりと木についての興味、関心の深まりに繋がったこと。
- ④どんな木を使っているのか等、興味を持ったり、机や椅子の木の種類に興味を持つ様になった。
- ⑤また“これは何の木で出来ているのか?”というふうに、木への関心が強まりました。

木に対する親しみや興味が増したことを示す記述(①, ②)、木の性質や種類といった具体

的な興味に関する記述が見られている（③～⑤）。

C) 感性・表現

- ①他の素材でもそれをするようになりましたし、自然に対する感じ方も変わったように思います。
- ②道を歩いていても木を見る目が変わったり、世界が豊かになった！
- ③身近にある木を使った製品を気にするようになったり、街路樹をみても何の木なのか気にするようになった。
- ④木の種類について考えるようになったり、手で重さを感じたり匂いをかいでみたり、様々な観点から木に触れることが出来るようになった。
- ⑤木製品や木に触れる機会があると、つい触り心地を確かめたりにおいを確かめるようになりました。

日常生活において、自然（①、②）や生活で触れるモノ（③）の見方が変わったことを示す記述、木に触ったりにおいをかぐという木に対する感性の高まり（③～⑤）といった、感性の成長を示す記述が見られている。

D) 保育・子どもへの応用

- ①自然の素材の手触りや香りに、子どもたちが興味をひかれると知り、保育計画の幅が広がった。
- ②将来自分が保育士になったときに、子どもたちに木について学びながら、お守り等、ちょっとしたものを作ってみたいと思っている。
- ③身近な物ではあるが、保育における制作の場面では使う機会が少ないのではと思う。そして、珍しい素材のように私は感じる。それは、子どもも同じようで、紙や廃材を使う（ペットボトルなど身近で、よく使うもの）制作活動と比べて、好奇心旺盛な様子が見られた。そのような子どもの様子を見ることができ、子どもの声を聞け、とて

も勉強になった。

- ④外活動において、実際に子どもたちに体験してもらうのに、どのようにすれば興味をもつことができるかなど様々な工夫の方法が学べた点。
- ⑤自然に目を向けるきっかけにもなり子どもが不思議に思うだろうという子ども目線で物事を考えるようになったこと。
- ⑥子どもたちに図工として木に触れてもらうのは準備や子どもの作業が難しいと思う。特別な時間を設けたり、時間を何日間に分けるなどしてゆとりを持ってとる必要があると思うが、今後保育現場に立って木育を行っていききたいと思う。

保育への活用として、教材のアイデアを得ることが出来たこと（①、②）、保育における木育の意味を考えたこと（③）を示す記述が見られている。また、ワークショップを通して子どもの視点について考える事が出来たことをうかがわせる記述も見られている（④、⑤）。さらには、実際に保育に導入する際の難しさを感じたことを示す記述も見られている（⑥）。

設問3 木育の保育現場への応用

設問3では、木育の保育現場への応用についての意見を問うため、「『木育』は、保育現場でどのような可能性があると思いますか」と質問し、自由記述により回答を求めた。分析においては、設問2と同様に、認知的側面、動機付けの側面、情操的側面から以下のカテゴリーを設定し、それに含まれる記述を抽出した。

- A) 知識・理解：子どもの知識に対する効果に関する記述（7名（41.2%））。
- B) 関心・意欲：子どもが興味や関心をもつことや、楽しさを感じるなどに関する記述（9名（52.9%））。
- C) 感性・表現：子どもの五感や感性や表現に対する効果に関する記述（15名（88.2%））。

以下、各カテゴリーの記述内容について、代

表的なものを示し、その傾向について述べる。

A) 知識・理解

- ①木に関する知識をつけることができる。
- ②保育者が、木の種類ごとによって特徴があることを子どもが気づけるように働きかけたり
- ③木育を通して道具の使い方を覚えることができる
- ④自然の大切さを学ぶことができる。
- ⑤木の大切さを知り、環境問題（紙のムダづかいについてなど）について考える機会を設けることができる。
- ⑥木のおもちゃ、身近にある木で出来たものを通して、日本の文化や、自然の素材のもつ良さを知ってもらえると思います。

木に関する知識（①，②），さらには活動を通した道具の使い方（③），自然（④），環境（⑤），文化（⑥）に対する知識の獲得ができていることを示す記述が見られている。

B) 関心・意欲

- ①日常にありふれている木について子ども達が興味を持つきっかけになると思う。
- ②木という身近な素材について、子どもが興味を持つことができ
- ③自分で物を作る楽しさに気付けるように思う。
- ④園内の自然はもちろん、その地域や家の周りなどの身近な自然に興味をもつ。

木に関する興味（①，②），さらにはつくるという活動の楽しさ（③），自然や環境（⑤）に対する興味が高まると考えていることを示す記述が見られている。

C) 感性・表現

- ①紙やすりで木を磨く音に反応していたり、磨くことによって変化する木の色にも子どもたちは驚いていた。
- ②子ども達が木の肌触りやにおい、色等を感じ

る事により、子ども達の感覚が刺激されると思う。そのことにより、子ども達の感性を豊かに育てられると思う。

- ③五感で感じることで、身近な環境に対しての気づきや感覚が生まれるような事が続く事で生まれるかと思います。
- ④木という天然の素材にふれることで木のぬくもりを知ることができる。
- ⑤木のおもちゃのにおいや、手触りを大きくなくても子どもたちは憶えていると思う。
- ⑥においや手ざわりのちがいが、重さの違いなど、プラスチックのおもちゃとちがって、同じ大きさでも木の種類によって、様々な楽しむことができるなど。
- ⑦経験をしながら感じたことを言葉に表したり人に伝えたりすることで表現する力。
- ⑧皆で同じ木から生まれたお守りを持つことで、自分たちが繋がっていると感じることも出来る。
- ⑨幼少期から自然にたくさん触れることで心が豊かに育っていくと思う。

木育の活動が子どもの感性に訴えかけ（①），五感を刺激すること（②，③）を示す記述が見られている。また、木の温もりや手触り，においなどの感覚に働きかける（④～⑥）と考えていることを示す記述が見られる。さらには子どもの表現力を伸ばすこと（⑦），情操を豊かにする効果があると考えていること（⑧，⑨）を示す記述が見られる。

以上，質問紙調査の結果を総合すると，学生の多くは本研究で取り上げた木育のワークショップを有効なものであると捉えていた（問1）。問2より，特に，木そのものについての知識を獲得する以上に，木に対する興味，感性や表現についての気づきに関する記述が多く見られており，本ワークショップが素材としての木に対する学生の動機づけを向上させたことがうかがえる。また，保育者志望の学生を対象にしていることから，木育のワークショップを通した感想として，保育教材のアイデアや子ども

への活用など、自分が保育現場でどのように木育を活用するのか、という点について考察がなされていた。

木育の保育現場での可能性について質問した問3においては、子どもの感性や表現力を伸ばすことを指摘する意見が多く見られた。これは、多くの学生が木育を知覚的側面よりも子どもの情動的側面に対して効果を持つものとしてとらえていたことを示していると考えられる。

また、聞き取り調査および行動観察からは、「木育」の実践後の学生が制作する作品や、造形ワークショップなどの教材研究に対する取り組み姿勢において、具体的変化が見られるようになった。

3-2. 作品にみる学生の「学び」の深まり

以下は、特に変化の見られた2名の学生について、研究作品を具体例として取り上げる。

【作品事例A】

「木育」実践前の学生Aは、「木材を使った手先を動かす手づくりおもちゃ」をテーマとして、完成する作品のクオリティや動きの面白さなどに着目して研究を行っていたため、素材の持つ効果や地域との関わりなどは考慮していなかった。実践後、学生Aは自分が住む門真市にある天然記念物の楠の大木を取り上げ、この楠の大木を使って子どもたちと地域を理解していく教材研究へと変化していった。楠の強い香りや、葉・枝・板材などの手触りなど、あそびを通して視覚・触覚・嗅覚・聴覚を中心とした五感を育むことを目的とした作品に変化していった。ピースごとに紙やすりの番数を変えることにより、子どもたちが手触りによる違いを発見するなどの工夫が見られる作品となった(図2)。

【作品事例B】

「木育」実践前の学生Bは、「子どもの感性に働きかける保育室の装飾」をテーマとしており、季節感や視覚的な効果のみに着目し研究を行っていた。しかし、「木育」が自然環境を重視することや、地産地消がコンセプトにあるこ



図2 「にこにこボックス」(材質:楠)

とを学び、学生B自身が住む京都を取り上げ、京都で採れる杉材の利用へと変化していった。自然の大切さを子どもたちと共有することや、板材スリット(板目材に切れ目・隙間をあげ、木口が多く露出するように加工)による空気清浄作用など、園内の環境を考え、取り付けパーツ(季節ごと)で子どもたちが壁面構成に参加できる作品として仕上げた。地域や自然、環境について配慮された作品となった(図3)。



図3 「なかよし」(材質:杉)

どちらの学生も、実践前は単なる興味から作品を考えていたが、実践後は具体的な作品に対する意識が高まり、保育者養成における研究作品としては、作品のコンセプトや技能、工夫する知恵が高いレベルまで達したことが伺える。

また、実際の保育者となったときに「木育」を活かしていこうと考えるなど、教材研究の上でも前向きな姿勢がみられるようになった。

このように「木育」の実践が、自然や人とのふれあい・関わり方、材料の捉え方、作品を通

した感覚の大切さ、表現力の大切さなど、造形領域に関わる実践的教材として有効であることが導出された。またこの実践は、広く他の表現領域につながる「学び」に深まることが期待されるため、引き続き実践事例を積み重ねていくことにより、実践的教材としての可能性を明らかにすることを今後の課題としたい。

付記

本研究は、平成24～26年度科学研究費補助金基盤（C）研究課題（課題番号：24531033）「保育者養成に関わる造形領域における実践的教材の研究」（研究代表者、矢野真）の補助を受けて行われたものである。

参考文献

矢野真（2007）、子どもに対する造形支援向上のための「直取り」技法研究Ⅰ—自然の石を「型」に用いた教材研究を中心として—、美術教育研究 No. 12：1-13
厚生労働省 編（2008）「保育所保育指針解説書」、

フレーベル館、（pp. 19-20, pp. 199-213）
矢野真、田爪宏二、高垣マユミ（2008）、造形ワークショップを通した大学と行政、地域の連携による子育て支援に関する実践的研究、鎌倉女子大学学術研究所報 Vol. 8：45-56
矢野真、吉津晶子、田爪宏二（2009）、教材開発を通した表現教育のあり方に関する実践研究、全国保育士養成協議会第48回研究大会研究発表論文集：192
矢野真（2011）、教材開発を通した子どもの創造性を育てる表現教育のあり方に関する研究、大学造形美術教育研究第9：20-25
矢野真、吉津晶子（2011）、造形と音楽を中心とした表現領域の再考に関する実践研究—「おととかたち」ワークショップを通した学生の学びを手がかりに、日本保育学会第64回大会発表要旨集：289
矢野真、松井勅尚（2012）、保育者養成校における「木育」実践の可能性～ワークショップによる学生の学びを手がかりに、日本保育学会第65回大会発表要旨集：629
矢野真、松井勅尚（2013）保育者養成校における「木育」実践の可能性Ⅱ～学生の「学び」から見る表現領域に関わる実践的教材として、日本保育学会第66回大会発表要旨集：746
文部科学省（2008）「幼稚園教育要領」